

東京湾を埋め立て京浜工業地帯をつくった 「九転十起」の人、浅野総一郎の事績を訪ねて

浅野総一郎翁（1848～1930）は「九転十起」の人といわれる。「七転び八起き」にとどまらず、何度も失敗して、そのたびに再起して立ち上がった。富山県の氷見から東京に出て、石炭、石油、セメント、海運などの事業を興し、この国の近代化の推進に大きな役割を果たした。欧米の港湾がコンクリートで固められ、船が接岸できるように整備されているのを見て、東京湾の埋め立てを進言。しかし、政府はなかなか腰を上げず、ついに自ら埋立工事に立ち上がった。その壮大な構想力と実現力、渋沢栄一や安田善次郎ら同時代の実業家たちの力を結集する人間関係能力にも傑出していた。いくつかの評伝をもとにその生涯をまとめた。

■ 医師から商人へ

浅野総一郎翁は、1848（嘉永元）年、越中国射水郡藪田村（現富山県氷見町藪田）で生まれた。浅野家は藪田村の旧家で、父・浅野泰順は医師。総一郎はその家の長男として生まれたが、16歳上の姉がいて、姉が婿をとり、その間に生れた子が浅野家の跡取りになると決まっていたため、総一郎は6歳で、養子に出された。

養家も医師で、この養父から医術を教わり、総一郎も一時医師となった。しかし、往診していたコレラ患者を次々と死なせてしまい、無常を感じ、「医師はいやだ。自分は加賀の銭屋五兵衛のような商人になる」と決めて、実家に戻った。

このとき、父はすでになく、村の実力者・山崎善次郎に間に入ってもらって養子縁組を解消。その後、商いの道を歩みはじ

める。

最初に縮帷子ちぢみかたびらと呼ばれる夏用の着物をつくる工場を起こした。女工を雇い入れ、縮を織らせ、染色し、行商して歩いた。醤油の醸造にも手を出したが、採算割れを起こして廃業いねこ。稲扱きのレンタルや氷見針の行商にも挑戦し、いずれも失敗した。

やがて山崎善次郎のすすめで地元の旧家の婿養子となり、舅しゅうとに資金を出してもらって、産物会社を起こした。農家からも資金を募り、地元でつくったムシロ、畳表、ゴザなどを、越後や北海道まで運んで販売。販売先からもさまざまな物品を仕入れて、地元で販売をした。しかし、大量に買い付けた米に不良品があつて、多額の負債を抱えてしまい、舅を怒らせ、離縁された。

「くじけてはだめだ、お前はきっと成功する。七転び八起きして、それでも足りなければ、九転十起すればよい」、山崎善次

郎はそう励ましたという。

借金返済のために高利貸しの「金貸しお熊」を頼った。お熊からの借金が300両に達し、厳しい取り立てが迫ったとき、母・リセは、自分が盾となって総一郎に逃げるよう促した。総一郎は氷見から富山湾沿いに歩いて北陸道に入り、越中、越後を経て14日間歩き続けた後に、東京にたどり着いた。1871（明治4）年、総一郎が23歳の時のことである。

■水売りから薪炭商、石炭商へ

東京で最初にはじめた商いは水売りだった。御茶ノ水から清水を汲み、砂糖を入れて通りがかりの人に1杯1銭で売った。この頃、明治政府の新貨条例によって、それまでの1両は1円に変わっていた。

やがて、氷見の出身の商人で、^{かずさのくに}上総国姉崎（現在の千葉県市原市）で船問屋を営む下川半左エ門を通じて竹の皮を仕入れ、それを洗って伸ばして、天秤棒でかつぎ市場で売り歩いた。総一郎はこの頃、「大塚屋・大熊良三」と名乗った。「金貸しお熊」からの追跡を逃れるためだった。

総一郎は「重吉」という若者を雇い入れ、生涯の伴侶・サクと結婚。さらに氷見から上京した弟の貫一も加わって総一郎の仕事を手伝った。

竹の皮の商いを1年近く続けた総一郎は、姉崎に薪炭が集まっていた、その価格が比較的安いことに気づき、薪炭商から薪

炭を買い込んで、それを船で横浜港まで運んだ。薪炭を保管する納屋が必要だったが、それを用意することなく、船が横浜に着くとすぐ、総一郎はすべてを神奈川県庁に売り込むことに成功した。

薪炭の商いは、さらに単価の高い石炭の商いに変わり、郵便汽船会社、神奈川県庁、税関、電信電話局、裁判所、警察署、病院などに販売した。石炭は、夜の街を照らすガス灯や蒸気機関の燃料として、この頃、需要が急速に拡大していた。

■深川セメント工場

横浜市瓦斯局に石炭を売り込みに行ったとき、石炭を燃やした後の大量のコークスの残骸の処理に困っているという話を聞いた。そこで総一郎は、東京・深川の工部省セメント製造所に、コークスを石炭と粘土と一緒に焼いて、セメントをつくる実験を進言し、実験は成功して、それまで廃棄されていたコークスが資源として利用できることがわかった。

この話を聞いた渋沢栄一は、自分の経営する東京ガスで発生したコークスを王子製紙で燃料として利用しようとしたが、うま



浅野総一郎翁肖像（出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」）

くいかず、総一郎に相談を持ち掛けた。総一郎はこれも、深川のセメント製造所で処理する道筋をつけた。これがきっかけで、総一郎と渋沢の交流がはじまった。渋沢は徳川慶喜の家臣で、後に明治政府の官僚となり、その後、第一国立銀行や東京証券取引所の創設にかかわった経済界の実力者で、総一郎と渋沢の交流は、その後、生涯にわたって続いた。

1877（明治10）年、西南戦争が起こり、日本中で船が不足し、石炭が横浜に届かなくなった。総一郎は九州に渡り、渋沢からの紹介状で船を手配して、石炭を横浜に運んで大きな利益を得た。この頃、浅野家の家督を継いだ甥の泰仲が上京。総一郎は、上京前の借金を返済するために、泰仲に借金の10倍を超える5000円を託した。同時に「大塚屋・大熊良三」の名前を「浅野商店・浅野総一郎」に改めた。

1883（明治16）年、総一郎は、採算がとれなくなって操業を停止していた官営の深川セメント工場の払い下げを政府に陳情した。渋沢栄一の口添えもあって、セメント工場は総一郎に貸し下げられ、翌1884（明治17）年には払い下げられて、浅野セメント工場となった。渋沢は、側近の大川平三郎をこのセメント工場に送り込み、大川はその後、総一郎に次ぐナンバーツーとしてセメント工場の経営全般にかかわった。

セメント工場時代の総一郎は、毎朝5時に出社したといわれる。6時に出勤してく

る職工たちの1人ひとりを激励し、「セメントで焼けない家を建ててこの国の財産を守ろう」と呼び掛けた。さらに、良い仕事をした者は給料を上げ、遅刻した者は黒板に名前を書き出すなど、信賞必罰を徹底。それまで担当外の仕事に関心を払わなかった職工たちは、工場の業績に関心を払うようになり、互いに助け合って仕事をするようになった。セメント工場では床面が熱く、職工たちは下駄を履いて作業していたが、総一郎の妻・サクは、毎日工場に入っ、職工たちが履きつぶした下駄を洗い、鼻緒をすげかえたという。

■磐城炭鉱の開発

明治政府は、この頃、官営工場を次々と民間に払い下げた。当初は赤字工場を売り払って国の欠損を小さくするためだったが、やがて民間活力を積極的に利用しようという考え方から、高い収益を上げていた工場までが払い下げられるようになった。

総一郎は、釜石製鉄所の払い下げにも関心を持ち、渋沢栄一と古河市兵衛にも共同出資を呼び掛けたが、釜石製鉄所は結局、田中長兵衛が払い下げを受けた。三池炭鉱の払い下げにも手を挙げたが、こちらは三井に払い下げられた。北海道開拓使の麦酒醸造所は、大倉喜八郎が払い下げを受け、大倉と渋沢と総一郎の3人が共同出資して札幌麦酒を立ち上げた。

同じ頃、総一郎は福島県のいわき磐城地域の有

力者から、この地域の炭鉱開発を持ちかけられた。東京の石炭の大半は九州から運ばれてくるが、磐城なら九州よりもずっと東京に近い。早速調査して豊かな鉱脈があることがわかり、1883（明治16）年、総一郎のほか、渋沢栄一、大倉喜八郎らが出資して磐城炭鉱会社を設立した。

採掘された石炭は、牛馬の背に乗せて小名浜港まで運んだ。しかし、小名浜港は遠浅で、帆船が棧橋まで近づくことができず、石炭は、屈強な男たちが胸まで水に浸かりながら歩いて運び、船に積み込んだ。このために輸送費が高騰して每期欠損が続いたが、1897（明治30）年、日本鉄道海岸線（現在のJR常磐線）が開通。これによって東京まで鉄道で陸上輸送できるようになり、ようやく経営が安定した。

■浅野回漕部と東洋汽船

この頃の世界海運業は、三菱系の日本郵船が主導権を握っていた。総一郎はそれに対抗して1887（明治20）年、中古船を購入して浅野回漕部をスタートさせ、屯田兵2000人の北海道への輸送を引き受けたり、故郷・富山の伏木港との交易を開始したりした。

1896（明治29）年には、渋沢栄一、大倉喜八郎、安田善次郎ら経済人に、太平洋横断のサンフランシスコ航路を開設したいと打ち明け、全員の賛同を得て「東洋汽船」をスタートさせた。

総一郎はアメリカに渡ってニューヨーク

のPM（パシフィック・メール）社と交渉し、サンフランシスコ・香港間の航路権を獲得。さらにイギリスに渡って6000総トンの汽船3隻を発注し、「太平洋定期航路」の運行に参入した。乗船客の中には、孫文や野口英世の名前もあったといわれる。総一郎は船が着くたびに、一等乗船客全員を東京・三田の私邸「紫雲閣」に招いて、家族総出で歓待した。これは「浅野の茶会」と呼ばれたという。

東洋汽船は南米航路も開設してブラジルへの移民の移送にも貢献したが、1924（大正13）年にアメリカの排日移民法が成立したことが響いて業績が悪化。1926（昭和元）年には一部が日本郵船に合併され、残った貨物輸送部門も1960（昭和35）年、日本油槽船に吸収合併されて、東洋汽船は消滅した。

■東京湾埋立事業

浅野商店の中核をなしたのがセメント事業で、1884（明治17）年に払い下げられた深川工場のほか、1894（明治27）年には北九州の門司にセメント工場つくった。

明治政府の欧化政策に沿って、多くの建物がヨーロッパ風の近代建築に建て替えられたことで、セメントの需要は大きく伸びた。1889（明治22）年には、政府は神奈川県知事に横浜の築港を命じ、東と北に2つの防波堤が築かれたが、そのためのセメントは浅野セメントが供給した。その後、国の



横浜港から見た東京湾埋立地



近代化とともにセメントの国内需要が高まり、さらにロシアのウラジオストク港の建設やウスリー鉄道の建設、マニラの築港用にも大量のセメントが輸出された。

太平洋航路開設のために欧米に渡った総一郎は、欧米各国の港湾がことごとく埋め立てられ、セメントで固められて、大きな船が接岸できるようになっていることを知った。港湾のそのすぐ近くまで鉄道が敷設されていて、上陸した人や陸揚げされた貨物は、すぐに汽車に乗り換えて各地に運ばれていく。これに対して日本では大きな船が接岸できず、沖合に停泊した船から、人や貨物を小舟に移し替えて岸まで運んで陸揚げする。欧米に比べるとあまりにも非効率だった。

海外からの人の往来と物資の交流をより盛んにするためには、港湾施設の整備が不可欠である。総一郎は1899（明治32）年の「品川湾埋立出願」を皮切りに、東京府や神奈川県に繰り返し埋立計画を提出したが、なかなか受理されなかった。

「これだけの大事業はしかるべき金融機関の保証がなければとても許可できない」と当時の神奈川県知事は言ったが、この事業に賛同し保証を与えてくれたのが、同じ富山県出身で安田銀行を創設した安田善次郎だった。

安田善次郎は自ら現地足を運び、総一郎の計画の有望性を高く評価した。そのことが広く伝わって、次々と賛同者が現れ、1912（明治45）年、総一郎は鶴見埋立組合を設立。翌1913（大正2）年から、鶴見から川崎にかけての臨海部に、総工費350万円を投じて150万坪の埋立工事がはじまった。

この工事のために、国内はもとより近隣諸国からも仕事を求めて人々が集まり、周辺地域の人口は急増したという。埋立事業は15年をかけて1927（昭和2）年に完成。新たな造成地には、浅野セメント川崎工場、浅野造船所、総一郎の娘婿・白石元治郎が経営する日本鋼管など、浅野財閥の各社が進出した。

東京湾の埋め立ては、沿岸部を工業地帯に変え、大型船が接岸して原材料を供給し、製品をそのまま海外に輸出することを可能にした。開発はその後、神奈川、東京から千葉の沿岸部にまで及び、



浅野学園（横浜市神奈川区子安台）から
見下ろした東京湾埋立地



浅野総一郎銅像
（浅野学園内）

この地域を船で直接世界と結びつけて、昭和の経済発展の基盤となった。

1924（大正13）年、埋立地に建設された工場群に通勤する人々のために、鶴見臨港鉄道が敷設された。この路線は、現在はJR鶴見線となっており、その駅名に、「浅野」、「安善」、「武蔵白石」、「大川」などがある。これらは浅野総一郎、安田善次郎、白石元治郎、大川平三郎に由来している。

1930（昭和5）年、総一郎は欧米視察旅行に出かけた。敦賀からウラジオストクに向かい、シベリア鉄道でユーラシア大陸を横断して欧州に入ったが、途中、ベルリンで病を発症した。その後アメリカに渡り、ニューヨーク、サンフランシスコを経由して横浜に帰国。大磯の別邸で療養中に食道癌で亡くなった。享年82歳。

※本稿の執筆に当たって次の図書を参考にしました。出町譲著『九転十起 事業の鬼・浅野総一郎』（幻冬舎、2013）／新田純子著『その男、はかりしれず』（サンマーク出版、2000）

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「仕事の事典」をネット公開中